

図書館報の発刊に当たり、シリーズ随想を書かせていただきます。

まず、図書館は書籍や資料に触れるだけでなく、新しい視点を入れたり想像力を育んだりするための大切な空間です。本校の図書館もまた、皆さん一人ひとりの学び、成長のための支えとなっています。皆さんが興味を持つように特集を組んだり、皆さんからの一言を募ったり等、楽しみながら学ぶことができる、とても素敵な空間になっていると感じています。

今年度、SAHの一環として本校の図書委員がBook Fesを開催してくれました。「読み聞かせ」や「ちいかわ占い」、「部活動とのコラボ」など独創的な企画を次々と実施してくれ、図書館の新たな可能性を見せてくれました。今後もどのような企画が出されていくのかとても楽しみです。

私自身、仕事を始めてからは図書室や読書から離れてしまった感がありますが、高校生や大学生の時には比較的多くの時間を図書室、図書館で過ごしていました。私が通っていた高校は当時は学習室のような部屋は無く、その代わりに図書室を学習のための場として開放していました。高校3年生の夏休み、家では全く受験勉強に集中できなかった私は、図書室が開いている日はほぼ毎日、片道1時間、自転車をこいで学校の図書室に通っていました。「往復2時間もの時間を通学に費やすのは受験生の夏休みとしてどうなのか」という気持ちもありましたが、私の集中力はそんなことを言われていられる状況ではありませんでした。家では色々な事に気が散り、全く集中できないのに学校の図書室ではなぜかスッキリした気持ちで長時間、学習に向かえることができたという記憶があります。

日々の受験勉強の中で疲れてしまった時に、図書室にあった一冊の本を読み始めました。同じように学校で学習をしていた友人の誰かに勧められたものだったかもしれません。黒井千次さんの「春の道標」という、戦後間もない頃、旧制中学から新制高校へと移行する時代の若者たちを描いた小説でした。文学に憧れ、学生運動から強い影響を受け、思春期の恋愛に心を悩ませるといった内容だったと思います。私自身は「無気力」「無関心」「無責任」の三無主義や「しらけ世代」と呼ばれ、物事に対し、斜に構えることを良しとするような風潮の中で高校生活を送っていたので、自分たちより遥か上の世代の若者にこんなにも豊かな高校生活があったのかと衝撃を受けたことを覚えています。現在は、この作品に触れてからもう、四十年以上の月日が経っているわけですがそれでも覚えているので相当な衝撃だったのだと思います。自分より上の世代の人たちにも、かつて若者だった時代があるという当たり前のことを本当に認識したのは、この時からだったかもしれません。この作品は教員になってからも色々な学校で何度も紹介させていただきました。

この「春の道標」は自分が受けた共通一次試験(今の共通テスト)に出題されたという後日談がありました。それもあって一層記憶に残っているのかもしれませんが。結果は出題されていない部分のストーリーまで考えを回してしまい、散々でした。

読書は時として、自分の一時代のアクセントとして当時の出来事や思いと繋がり記憶の中に残り続けることがあります。それは、読書をしている「今」分かることでは無く、何年もたってから気がつくものなのでしょう。皆さんが前橋南高校の図書館で皆さんの高校生活の象徴となるような一冊に出会えると、とてもうれしく思います。